よって発作増悪の既往があったことより，今後の薬剤選択のため，発作軽快後ステロイドによる発作誘発試験を行った。その結果コハク酸エステル型ステロイドが発作を誘発している可能性が高いと考えられた。

8. シャーグシュトラウス症候群と考えられた1例

川名秀忠，橋爪一光，笠松　紀雄
加藤俊哉
（県西浜松医療センター・呼吸器科）
半沢　儁，籾木　茂，佐々木一義
（同・胸部外科）

症例は17歳の女性。発熱，腹痛，血尿，皮疹にて発症し，気管支喘息の既往，好酸球の増加を認め，経過中に胸部X線上多発性斑状影が出現した。BAL，TBLB にて好酸球を主体とする間質および血管壁への炎症細胞浸潤を認めシャーグシュトラウス症候群と診断した。本疾患の BAL，TBLB の検討は少ないが胸部X線上異常例に対して有用と考えられた。

9. 閉塞性肺機能障害を呈した Stevens-Johnson 症候群の1例

新井康弘，内山隆司
（千大・肺内）

Stevens-Johnson 症候群の皮膚症状改善後も喘息が持続し，気管支の炎症，狭窄がみられ，肺機能所見，胸部X線所見より細気管支レベルでの病変の存在が示唆された。経過中縦隔気腫，気胸を併発し，閉塞性気管支細気管支炎（BBO）の可能性が考えられた。

10. CPAP 療法により睡眠時上気道筋電図活動の低下をみた睡眠時無呼吸症候群の1例

阿部雄造，新島真文
（千大・肺内）

閉塞型睡眠時無呼吸症候群患者で，夜間睡眠中のポリリムノグラフィーを施行し，同時に頤舌筋および横隔膜筋電図を記録し，これを鼻 CPAP 加療の前後で比較した所，CPAP により頤舌筋の活動が選択的に抑制された。これは CPAP の作用機序が，受動的な上気道の開大・維持であることを示している。

11. 当院における在宅酸素療法の検討

須田　明，大滝雅之，篠崎克己
瀧澤弘隆　（塩谷総合）

当院過去7年間の在宅酸素療法31例について検討した。開始時平均年齢は70歳。COPD，気管支拡張症，肺結核後遺症が84%を占めた。生存例では開始後 PaO_2 が改善した。3生率は46%。開始前の血液ガスと予後は関連性を示さなかった。DOA 症例が多く今後の検討が必要と思われた。

12. 重度の呼吸不全を呈した夏型過敏性肺臓炎の1例

泉崎雅彦，江渡秀紀
（千大・肺内）

症例43歳，男性。平成4年8月中旬より呼吸困難，咳嗽，発熱出現し，近医での抗生剤投与効果なく転院となる。胸部X線上両肺野のびまん性陰影と PaO_2 38.6 torr という低酸素血症，リンパ球減少症（384/ml）を認めた。症状は入院により改善し，帰宅により悪化した。諸検査により夏型過敏性肺臓炎と診断。症状の増悪に伴いリンパ球が減少する傾向を示した。

13. 慢性のパラコート暴露が原因と考えられた間質性肺炎の1例

板倉明司，江渡秀紀
（千大・肺内）

患者は63歳，男性。平成4年5月より進行性の呼吸困難が出現し，当科を受診した。胸部X線にて上肺野に巨大なブラと両下肺野に網状陰影を認めた。TBLB にて間質と小動脈周囲の細胞浸潤を認めた。本患者は，20数年来無防備でパラコート散布を行っており，慢性のパラコート暴露が原因で，間質性肺炎をきたした可能性が考えられた。

14. 小柴胡湯と α- インターフェロン併用中に間質性肺炎をきたした C 型慢性肝炎の1例

中園宏紀，金子　昇，鏡味　勝
冨岡玖久　（東邦大・佐倉）

症例は，58歳の男性，営業職。平成元年9月よりC型慢性肝炎の診断で小柴胡湯，平成4年5月10日より α-インターフェロンが開始された。6月より乾性咳嗽，労作時呼吸困難が出現。DLST にて，両剤の併用で陽性となり，薬剤性肺炎が疑われた。

15. 縦隔および肺門リンパ節に石灰沈着が著明であったサルコイドーシスの1例

大西洋一，佐藤圭一
（千大・肺内）

検診の胸部X線で発見され CT にて広範囲にわたる縦隔および肺門リンパ節の石灰沈着を認めた。各種検査